

## 基礎「循環器疾患－釣藤散」

## 釣藤散の基礎：作用の予測と裏付け

千葉大学 薬学部 薬効・安全性学

矢野 眞吾

【要点】釣藤散は慢性の頭痛、めまい、肩こりなどを訴え、時として、のぼせ、耳鳴り、不眠などを伴う患者に用いられる。これらの症状を呈する病気として高血圧や動脈硬化、神経症などが考えられる。最近、痴呆症に対して有効であったとの臨床報告もある。しかし、釣藤散の基礎薬理学的な薬効評価については報告が殆ど見当たらない。一方、釣藤散を構成する生薬には、釣藤鈎を含めて11種ある。そこで、高血圧症とその随伴症状に対して処方される漢方方剤12種（釣藤散、三黄瀉心湯、大柴胡湯、防風通聖散、桃核承気湯、桂枝茯苓丸、通導散、黄連解毒湯、柴胡加竜骨牡蛎湯、七物降下湯、八味地黄丸、真武湯）を選び、11種の生薬の出現頻度を比較すると、茯苓、生姜（5方剤）、甘草（4方剤）、半夏（3方剤）、釣藤鈎、人参、橘皮、防風、石膏（2方剤）、麦門湯、菊花（1方剤）であった。出現頻度の解釈は難しいが、出現頻度の高い生薬が基本的な性格を賦与し、出現頻度の低い生薬が釣藤散の特質を形造るとも考えられる。中枢抑制作用が生姜、甘草、半夏、橘皮、釣藤鈎、人参に見られ、血管拡張作用・血圧降下作用が釣藤鈎、橘皮、人参に見られ、また、血液凝固阻止作用が茯苓、人参に見られることが報告されている。これらの報告には *in vitro* の成績が含まれ、薬用量も大きいので、そのまま、釣藤散の臨床作用を説明する訳ではないが、釣藤散の使われる病態と比較的よく合致している。一方、関連する生薬に含有される物質の薬理作用については、釣藤鈎含有アルカロイドだけでも、鎮静作用、神経節遮断作用、血管拡張作用、アドレナリン受容体遮断作用、抗Ca作用、などが判明しており、釣藤散に期待される薬理作用スペクトルを持っている。

【論点】(1)釣藤散は11種生薬配合の polypharmacy と考えられる。釣藤鈎を中心とする多岐にわたる薬理作用は釣藤散の治療効果に関係が深いことを論ずる。(2)これらの薬理作用は一般的に緩和であるので、臨床効果発現との間に隔たりがある。これを埋める方法論の必要性について論ずる。(3)患者の体質や体力と方剤構成生薬の関係、生薬間の複合作用などの漢方特有の問題点について言及する。